

高校生の会話における対人 コミュニケーション指導の効果

東京都／立教大学大学院博士課程在籍 行森 まさみ

概要

本研究の目的は、(1) 高校生の英語での会話における対人コミュニケーションへの意識と動機づけの関係、(2) 指導・練習という教育介入を受けることによる、意識と動機づけの変化を明らかにすることである。(1)については、言語行動よりも非言語行動により多く依存しており、「話し手として相手に返してもらえるような話題選びや話し方」、「聞き手として、興味・関心を示しながら質問をする」などという相手にも話しやすい配慮をするという点において特に改善の余地が見られ、それらは動機づけとも関係していた。(2)については、指導・練習後、言語行動に対する意識の高まりが確認され、実際の会話にもそれが表出している例が見られた。しかし、動機づけについては、教育介入による意識の変化のみが動機づけに影響を与えているとは言いきれないことが明らかとなった。

1 はじめに

日本人英語学習者のスピーキング指導において、文法・語彙を含む表現の指導や発音などの音声指導の研究が多くなされてきている。これらは主に話し手のために必要な知識・スキルの指導であり、意味伝達のために重要なものである。しかし、日常的な会話には必ず話し手と同時に聞き手が存在するものであり、発話された意図を聞き手が解釈、フィードバックをして適宜話者交代を図ったりしながら両者が会話に貢献することによって成り立っている。よって、話し手の育成のみならず、聞き手との相互行為を念頭に置き、お互いへの配慮をするという対

人コミュニケーション要素の指導は不可欠である。また、日本人が英語を学ぶのは今や英語の母語話者と話すためだけでなく、むしろ世界の非母語話者と思疎通を図るためだと言われている。したがって、英語学習者が英語の母語話者をまねて話すことだけでなく、人間の根底に存在するであろう、ある程度共通した対人コミュニケーション行動と、話し手と聞き手の相互行為という原理に気づき、意識して話すことも求められているのではないだろうか。

さらに、英語での会話が少しでも充実したときに感じる達成感からくる有能性、他者からの関心や他者との相互作用からくる対人関係性を充実させることにより、英語スピーキング活動に対する学習の動機づけが変化することも期待できる。

そこで本研究では、会話を円滑に進めるための対人コミュニケーションを意識することによって、高校生の英語での会話がいかに変化するかを分析すると同時に、会話における動機づけとの関係を調査し、検証する。

2 先行研究

2.1 対人コミュニケーション

会話の中で話し手の発話における意味の表出と解釈の原理のメカニズムを初めて明示的に示した Grice (1975) は、「協調の原理」(cooperative principles)の基本的な概念として、正常な会話というものは話し手と聞き手の協力的行為であり、コミュニケーションにおいては発話が何かの目的や方向に向かって進むような原則が両者の間に働いてい

るとし、それに応じて必要とされる貢献をするものであるとしている。さらに Grice は、文字どおりの意味を発話に関連する情報と会話の原則に照らすことによって推論的に生成・解釈される意図的な意味である「言外の意味」を「会話の含意」(conversational implicature)と呼んだ。これは状況や相手への配慮などから、文字どおりの意味を超えて相手に意図を伝達することを指している。このような相手への配慮という考え方は Lakoff (1973, 1975), Leech (1983), Brown and Levinson (1987) のポライトネスという概念と深く関係していく。ポライトネスには多様な定義があるが、それを良好な人間関係を築いたり維持するための言語行動とする見方が主流となっている。特に、Brown and Levinson のポライトネス理論では、他者に理解されたい、認められたいという欲求を「ポジティブ・ポライトネス」、他者に立ち入れられたくない、邪魔されたくないという欲求を「ネガティブ・ポライトネス」とし、前者は冗談や仲間うちの言葉使用を含み、後者は敬語使用などを含むとしている。堀他 (2006) は特に日本の英語教育ではポライトネスの研究成果について十分に取り入れられていないと述べており、村田 (2004) は高校の教科書ではポジティブ・ポライトネスの例は非常に少なく、実際に大学生に指導をしたところ、その会話の質と量が上がったと報告している。日本語の研究者もポジティブ・ポライトネスの重要性について述べており (宇佐美, 2001; 滝浦, 2005), 日本人が相手との心的距離を縮めるために相手へ配慮した言語行動を行っているとしている。

2.2 学習者の動機づけとの関係

以上のような、相手または自分の認められたいという欲求を満たすポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを積極的に行使することによって、会話への貢献に対する充足感や満足感という心理が英語学習者の動機づけに影響を与えることが考えられる。

外国語学習の動機づけに関する研究では、一般的動機づけ (Gardner, 1985) では教育への示唆が見いだせないとし (Dörnyei, 1994), 授業内タスクなどよりミクロな視点からの研究の必要性 (廣森, 2006; 磯田, 2008) や動機づけを高める要因に関する研究の必要性 (Dörnyei, 2001; 竹内, 2003), 「他者とのかわり」を枠組みに入れることの必要性 (Ehrman, Leaver, & Oxford, 2003) が指摘されている。さら

に、相手とのコミュニケーションにおける成功体験や、よい聞き手の育成が外国語を話そうとする動機づけに影響を与えるという研究もなされている。

3 研究の方法

3.1 目的

以上のような先行研究を踏まえ、本研究では以下の2点をリサーチクエスションとする。

- (1) 高校生の英語での会話における相手への配慮や会話への貢献にはどのようなものがあり、それは英語での会話に対する動機づけとどのように関係しているのか。(現状調査)
- (2) 指導・練習という教育介入を受けることによって、意識と実際の会話や動機づけはどのように変化をするか。(事後調査)

3.2 調査協力者と調査実施時期

本研究の協力者は高校2年生64名で、同じ年度の9月から2月の間に調査を行った。

3.3 手順

(1) 質問紙

言語的要素として、Brown and Levinson (1987) のポライトネス・ストラテジーより、話し手と聞き手によるお互いへの配慮や会話への貢献についての項目を取り入れた。また、非言語行動としてジェスチャーや相手の目を見ることなどは、大坊 (1998) を参考に項目として取り入れた。さらに、動機づけについては廣森 (2006), 磯田 (2008), Dörnyei (2001) の質問項目を参考にし、5件法の質問紙を用意した。

(2) 会話の録音 (現状調査)・分析

調査協力者間でペアを作り、トピックは各ペアで自由に選び (趣味・休日の過ごし方など), その会話の録音を行った。録音されたデータを書き起こし、相手への配慮や会話への貢献などの表出状況の分析を行った。

(3) 質問紙調査の実施・分析

会話録音後すぐに質問紙調査を実施した。このデータを使って現状での会話における意識の状況とスピーキングに対する動機づけの相関性を分析した。

(4) 指導の実施

以上の事前調査の分析より、相手への配慮や会話への貢献を意識しての英語スピーキング練習を毎週1回、計8回実施した。これまで調査協力者たちは英語で話すというどのような単語や文法を使って話すかという話し手としての文の作り方ばかりにとらわれていたようであるが、今回具体的な指導として、話し手として聞き手のことを考えた話題提供をすることや、聞き手に返してもらえるように聞き手の理解の確認をすること、質問されたら一言でなくできるだけ詳しく話すこと、また、聞き手としては話に関連した質問をしたり、聞き手からも話題提供をすることについての意識を喚起し練習を行った。指導のハンドアウト作成においては、大谷・村田・村田・重光(2009)を参考にした。

(5) 会話の録音(事後調査)・分析

指導後の事後調査として同様に5分ほどの会話を録音し、書き起こして分析を行った。

(6) 質問紙調査の実施・分析

事前・事後の変化を見るために、質問紙調査についても同様に調査を行い、その変化についてt検定を用いて分析し、また相関関係についても検証した。

4 結果と考察

4.1 リサーチクエスション 1

4.1.1 質問紙調査結果(表2参照)

指導前の現状調査では、会話時の非言語行動についての項目で高い意識がなされていた。具体的にはジェスチャーの使用や相手の目を見て話すこと、表情をつけて話したり聞いたりすることなどである。これは、伝えたいことを言語以外で補っているということであり、また、相手に対して「話を聞いている」、「会話を楽しんでいる」などの配慮も表していると言える。それに対して、言語行動については全体として意識が低く、非言語行動の項目間と、 $t = -2.62, p < .05$ で有意に差があった。具体的には、ポライトネス理論で述べられている「相手の名前の呼びかけ」(5件法で平均が1.82)や「冗談」(2.64)、「少しおもしろく話す」(3.10)などは数値が低かった。また、「相手に返してもらえるような話題や話し方をする」(3.30)、「質問をされたらyes/noだけでなく、関連した内容の話をする」(3.15)などの話し手の配慮の要素についても意識が低いと言える。聞

き手としては、「あいづち」(3.84)に関する数値は高いものの、「あいづちだけでなくその話題に関してコメント」(3.56)をしたり、相手に「質問」(3.38)をしたりといった項目は「あいづち」のみより数値が下であり、聞き手も会話に貢献するという意識の低さが明らかになった。同様に、聞き手として「話を聞きながらも、関連した自分のことについて話したり(2.92)、話題を提供する(2.92)」という項目も低く、話し手としても聞き手としても会話に貢献するようもう一言についての意識が低さが確認できた。

4.1.2 録音した会話からの分析

以上の質問紙による結果を踏まえ、実際の会話ではそれがどのような特徴として表出しているかの分析を行った。全体としては、会話の停滞や話題の変更、沈黙が多く見られた。

(1) 聞き手としての質問力

多くの調査協力者たちは、相手がある内容を話したとき、それに対して聞き手として興味・関心があるように適度に反応している。しかし、さらに相手が話した内容について理解を深めたり、もっと知りたいと相手に興味を示したりするための質問が欠落していることも多く、会話がそこで停滞している。これには、英語表現力の欠如も要因の1つとして考えられることも忘れてはいけない。以下はその一例である。

A: I... My club is rock music club.

B: Oh, it's good.

A: Thank you.

B: (laugh) (silence: 5 seconds)

A: My part is vocal and guitar.

B: Oh, it's very cool.

A: (laugh) Ah, we took the third place in the recently game.

B: Oh. It's good. (laugh)

A: (laugh) なに? あとなに? なに?

(silence: 7 seconds)

(2) 相手も興味を持ってくれそうな話題の提供

この調査協力者たちは友人同士、またはある程度お互いを知っているという状況である。そのようなペア同士では相手が興味を持ってくれそうなことの

予測もでき、話題を選ぶことができる場合がある。

A: Oh! Do you like cake? (laugh)

Cake is yummy!

B: Yummy! Very yummy.

A: You Are you? あゆ? your ... making cake?

B: No. Oh! Your making is very yummy. (laugh)

A: Oh! Thank you. (laugh)

このペアはこの後、寿司など食べ物で話題で会話を続けていく。

(3) 相手に返してもらえそうな話し方（相手の理解を確認）

一方的に自分がしたい話をするのではなく、自分が話している内容について相手が理解しているかを確認しながら会話を進めていくのは重要なことである。聞き手自身もわからないところを確かめるといふ方略は必要であるが、話し手もその機会を作ってあげる意識が必要であると思われる。以下の例では、Aが自分がとても興味のある江戸時代について話している。しかし、相手のBは質問もできないほど圧倒され、その後の会話はうまく続いていない。

A: I like Edo period. Edo's culture and people is so active and beautiful. The part of Edo period I like the best is the end of the period. The end of Edo period has a lot of famous event and people. I like them way of life. They didn't care themselves, fighting for the future of the county. And they change people's mind. You think they are so cool, don't you? I hope that all Japanese has a hot spirit like them.

B: It's great! (laugh) (clap)

A: Do you like Edo period?

B: Yes, I like, too. But, like you I don't know it like you.

実際の会話からの分析で以上のように会話の継続に行き詰まっている例について特に注目し、いかに双方が会話へ貢献し、協力的に会話を行っていくかという点において指導に活用することとした。

4.1.3 動機づけとの関係

次に、指導前の現状調査時において、相手へのどのような配慮の意識が会話に対する動機づけと関係しているのかを分析した。言語・非言語要素と動機づけに関する項目との相関係数は表1のとおりである。

話し手の言語行動として、「相手に配慮をした話題選びや話し方をする」という意識と動機づけに係る満足感や達成感にはそれぞれ相関係数が $r = .43, p < .01$, $r = .49, p < .01$ と中程度の相関があった。また、「質問をされたときにもう一言つけ加えて返し、会話へ貢献する」という意識や、「会話を盛り上げるために少しおもしろく話す」という意識も同様で、「あいづちにプラスもう一言」という意識をすることにも動機づけ項目との相関が見られた。話し手としても聞き手としても相手にいかに話をさせやすいようにするかという意識が会話への貢献へつながり、結果として会話が弾むきっかけとなり、満足感や達成感などと結びつくことが考えられる。また、会話を楽しむという充実感と相関が見られたものの中には、「オーバーに話したり、リアクションをとったりする ($r = .36, p < .01$)」や、非言語行動のジェスチャー ($r = .35, p < .01$) などがあるが、これらは英語での会話に限らず、高校生が普段日本語で行う会話と重なるものである。

この結果から、英語での会話の動機づけを少しでも高める会話の要素を認識し、意識させる教育的介入として、以上に挙げたような項目に焦点を置いて指導を行うこととした。

4.2 リサーチクエスチョン 2

初回調査時から指導・練習（詳細は「3.3 手順(4) 指導の実施」を参照）を経て実施した事後調査の結果は以下のとおりである。

4.2.1 質問紙調査結果

表2の変化量はt検定の結果の数値を示したものである。指導の前後において特に大きな変化が確認されたものは、「聞き手にも会話に参加してもらえよう話し手からの配慮」や「もう一言つけ加えて話し手も聞き手も会話に貢献」というような、指導で焦点を置いた項目とほぼ一致している。練習によって意識が高まったという効果が見られたと言える。また、聞き手として「相手の話へのリアクシ

■ 表 1：言語・非言語行動と動機づけに関する項目の相関係数（事前調査時）

	思ったより話せた満足感	「話した」という達成感	もっと話せるようになりたい期待感	「楽しんだ」という充実感
言語行動（話し手）				
相手によって、何をどこまで話すか考えて話した	.15	.24	.14	.25*
相手に返してもらえそうな話題や話し方をした	.43**	.49**	.49**	.30*
相手の好きなことを話題にしたり、相手のわかることを話題に入れた	.34**	.36**	.40**	.22
話をしながら、ときどき相手の名前を呼びかけた	.19	.09	-.19	-.03
質問をされたら yes/no だけでなく、関連した内容の話を詳しくした	.32*	.34**	.31*	.07
少しおもしろく（少しオーバーに）話した	.34**	.39**	.38**	.26*
少し高いトーン・テンションで話した	.30*	.23	-.05	.37**
冗談もまじえながら話した	.27*	.32*	.30*	.31*
言語行動（聞き手）				
「うん、うん」などとあいづちを打った	.12	.15	.04	.21
あいづちだけでなく、その話題に関して何かコメントした	.37**	.34**	.29*	.24
あいづちだけでなく、その話題に関して質問をした	.47**	.44**	.36**	.22
話の内容に合わせて適度にリアクションをした	.30*	.33**	.26*	.24
おもしろかったり、驚いたときは少しオーバーにリアクションをした	.24	.12	.16	.36**
相手の話の腰を折らないようにした	.14	.23	-.09	.07
話を聞きながらも適度に、自分のことについて話した	.38**	.32*	.02	.14
話を聞きつつも、話題も提供した	.28*	.27*	-.06	.18
話を聞きながら、相手に共感した	.34**	.41**	.29*	.32*
相手の話に賛成できない場合は、やんわりとした表現でそれを伝えた	.21	.19	.01	-.07
非言語行動				
身振り・手振りなどのジェスチャーを使った	.25*	.34**	.16	.35**
相手の目を見て話した	.04	.15	.21	.11
相手の目を見て聞いた	.08	.19	.31*	.15
感情を伝えられるように、表情をつけて話した	.24	.39**	.01	.25*
感情が伝わるように、表情をつけて話を聞いた	.16	.24	.22	.30*

(* $p < .05$, ** $p < .01$)

ンや共感」といった項目についての意識が高まった結果となり、アクティブに聞くという姿勢への変化があったと考えられる。事前調査では非言語行動が

言語行動より高かったが、今回は有意差は認められなかった。動機づけの項目については達成感と期待感の伸びが確認できた。

■ 表2：質問紙調査の結果（平均・標準偏差・変化量）

	事前調査		事後調査		変化量
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
言語行動（話し手）					
相手によって、何をどこまで話すか考えて話した	2.79	0.88	2.79	1.06	0.01
相手に返してもらえるような話題や話し方をした	3.30	0.92	3.62	0.74	2.21*
相手の好きなことを話題にしたり、相手のわかることを話題に入れた	3.61	1.01	3.94	0.78	2.09*
話をしながら、ときどき相手の名前を呼びかけた	1.82	0.83	1.73	0.81	-0.63
質問をされたら、yes/no だけでなく、関連した内容の話を詳しくした	3.15	0.96	3.58	0.77	2.76**
少しおもしろく（少しオーバーに）話した	3.10	1.18	3.32	1.03	1.12
少し高いトーン・テンションで話した	3.41	1.17	3.61	1.07	0.99
冗談もまじえながら話した	2.64	1.25	2.83	1.26	0.87
言語行動（聞き手）					
「うん、うん」などとあいづちを打った	3.84	0.82	3.82	1.07	-0.11
あいづちだけでなく、その話題に関して何かコメントをした	3.56	0.96	3.56	1.01	0.02
あいづちだけでなく、その話題に関して質問をした	3.38	1.07	3.83	0.85	2.67**
話の内容に合わせて適度にリアクションをした	3.43	0.97	3.77	0.96	2.02*
おもしろかったり、驚いたときは少しオーバーにリアクションをした	3.05	1.20	3.77	1.00	3.69**
相手の話の腰を折らないようにした	3.33	1.01	3.29	1.03	-0.22
話を聞きながらも適度に、自分のことについても話した	2.92	0.98	3.30	0.88	2.34*
話を聞きつつも、話題も提供した	2.92	0.90	3.11	0.88	1.19
話を聞きながら、相手に共感した	3.49	0.81	3.79	0.83	2.03*
相手の話に賛成できない場合は、やんわりとした表現でそれを伝えた	2.36	0.78	2.44	0.96	0.51
非言語行動					
身振り・手振りなどの、ジェスチャーを使った	3.56	1.22	3.80	1.22	1.14
相手の目を見て話した	3.43	0.92	3.95	0.90	3.27**
相手の目を見て聞いた	3.49	1.06	3.88	0.92	2.20*
感情を伝えられるように、表情をつけて話した	3.23	1.19	3.41	1.04	0.91
感情が伝わるように、表情をつけて話を聞いた	3.75	0.85	3.88	1.13	0.70
動機づけ					
思ったより話せたと思う【満足感】	2.93	1.15	2.83	1.00	-0.53
「英語で話をした」という達成感があった【達成感】	3.13	1.02	3.47	0.85	2.04*
もっと話せるようになりたいと思った【期待感】	4.36	0.93	4.64	0.48	2.24*
会話を楽しんだ【充実感】	4.26	0.85	4.36	0.94	0.64

(* $p < .05$, ** $p < .01$)

4.2.2 録音した会話からの分析

事前調査時には話題の変更、会話の停滞や沈黙が多く見られていた。伝えたいことが英語ですぐには出てこないという状況については大きな変化はないようであり、そのために起こる沈黙は事前調査と同様に事後調査でも生じていた。しかし、事後調査での変化としては、1つの話題について（または関連した話題について）長く話す例が多くなっていたこ

とが挙げられる。これは話し手がそれについてもう一言付け加えて詳しく話そうという意識と、聞き手がその話題に関連した質問などをしようとする意識が働いた結果ではないかと考えられる。同じような理由によって、会話の停滞も回避されている例が見られた。以下は、事前調査時に聞き手としてその内容について質問などがうまくできなかった調査協力者B（「4.1.2 (1) 聞き手としての質問力」の会話例）

の事後調査時のものである。(ペアの相手は前回と異なる。)冬休み中の旅行について互いに話した後の会話で、相手のAに質問をしながら、それに関連した自分のことについても話をし、さらに相手からの質問に対してももう一言付け加えて答えている。

B: Next time... where do you want to go? In Japan.

A: Ah, I want to go Hiroshima.

B: Oh, nice. Why, why?

A: Because its beautiful ... scenery.

B: Ah, I... I think so too. I ... want to go to Kyoto.

A: Why?

B: I like Japanese style. Food, kimono とか (laugh)
特に food (laugh)

4.2.3 動機づけとの関係

指導・練習をして言語行動についてその意識が高まった項目とそうでない項目(変化量に有意差がある項目とない項目:表2参照)とで、それぞれ動機づけとの相関を検証した。表3がその結果である。意識が高まった項目はほぼ動機づけの項目と関係性があるが、意識の高まりが確認できなかった項目で

■ 表3: 言語行動の意識と動機づけとの相関係数(事後調査時)

	思ったより話せた満足感	「話した」という達成感	もっと話せるようになりたい期待感	「楽しんだ」という充実感
意識が高まった項目(事前—事後)				
相手に返してもらえよう話題や話し方をした	.47**	.40**	.40**	.31*
相手の好きなことを話題にしたり、相手のわかることを話題に入れた	.35**	.39**	.39**	.32*
質問をされたら yes/no だけでなく、関連した内容の話を詳しくした	.33**	.35**	.30*	.15
あいづちだけでなく、その話題に関して質問をした	.50**	.48**	.38**	.23
話の内容に合わせて適度にリアクションをした	.31*	.35**	.28*	.35**
おもしろかったり、驚いたときは少しオーバーにリアクションをした	.22	.01	.31*	.40**
話を聞きながらも適度に、自分のことについて話した	.40**	.32*	.01	.01
話を聞きながら、相手に共感した	.34**	.42**	.29*	.35**
意識の高まりが確認されなかった項目(事前—事後)				
相手によって、何をどこまで話すか考えて話した	.10	.20	.04	.20
話をしながら、ときどき相手の名前を呼びかけた	.20	.11	-.15	-.12
少しおもしろく(少しオーバーに)話した	.35**	.40**	.36**	.25*
少し高いトーン・テンションで話した	.30*	.20	.01	.36**
冗談もまじえながら話した	.26*	.36**	.30*	.31*
「うん、うん」などとあいづちを打った	.12	-.10	.01	.15
あいづちだけでなく、その話題に関して何かコメントした	.40**	.36**	.29*	.30*
相手の話の腰を折らないようにした	.05	.12	.10	-.05
話を聞きつつも、話題も提供した	.30*	.28*	.09	.22
相手の話に賛成できない場合は、やんわりとした表現でそれを伝えた	.15	.20	.08	.08

(*p<.05, **p<.01)

も、動機づけと相関があった。具体的には「少しおもしろく話す」($r=.40, r=.36$, ともに $p<.01$) や「冗談もまじえる」($r=.36, p<.01, r=.30, p<.05$) などで、達成感や期待感といった動機づけの中でも特に高まったとされる項目との相関が見られた。よって、指導・練習という教育介入による意識の変化のみが動機づけを高めているとは言えない結果となった。

5 結論と課題

事前調査では、英語での会話時に意識することとして、言語行動よりも非言語行動により多く依存していたことがわかった。これは非言語行動で相手への配慮を表したり、伝えたいことを英語で伝えきれないことに依拠する一種の方略であるが、具体的な言語行動の方略の意識が薄かったとも考えられる。実際の会話では、質問紙調査での意識の低さ同様、「話し手として、相手に返してもらえよう話題選びや話し方」、「聞き手として、興味・関心を示しながら質問をしていく」などの点において特に改善の余地が見られた。これらの項目の中には動機づけの質問項目とも相関が高いものもあった。そこで、特に、動機づけと関連し、話し手も聞き手も話しやすいような配慮の意識を喚起し、実際にどのような会話の流れの中で配慮をすると会話の貢献につながるかという教育介入を行ったところ、「プラスの一言」や「話題選び」、「相手に返してもらえよう話し方」などの指導・練習を行った言語要素については事前調査と比較して意識の高まりが見られた。また、実際の会話における分析では、1つの（または関連した）話題を維持し、会話の停滞を回避す

る例が見られた。しかし、動機づけについては、教育介入による意識の変化のみが動機づけに影響を与えるとは言いきれない結果となった。対人コミュニケーションの意識は教育介入によって高めることはでき、実際の会話にも変化は見られるが、動機づけを高める要因との関係性についてはさらなる検討・調査が必要であると思われる。

対人コミュニケーションは、英語のスキルや得点アップに直接結びつくものではないかもしれないが、指導・練習の段階で、調査協力者たちは自分が言いたいことだけに集中するのではなく、相手のことを考えて互いに会話に協力する姿勢が見られた。このことから、中学・高校生の初期英語学習者の実践的な言語活動の中でこの意識を取り入れることによって、現在求められているコミュニケーション力、人間力を高める教育的きっかけになることを期待したい。

本研究の課題として、対人コミュニケーションの意識における実際の会話での表出状況について、さらに詳細にしていく必要がある。話題の変換や話者交代における頻度や発生状況を見るといったような細かな談話分析をすることで、より具体的かつ効果的な指導・練習方法の提案につながるとと思われる。

謝 辞

この研究の機会を与えてくださった（財）日本英語検定協会の皆様、選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。特に担当していただいた小池生夫先生、また、ご指導をいただきました平賀正子教授に心より感謝申し上げます。さらに、この研究に協力をしてくれました生徒の皆さんに深く感謝します。ありがとうございました。

参考文献（*は引用文献）

- * Brown, P., & Levinson, S. (1987 [1978]). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- * 大坊郁夫. (1998). 『しぐさのコミュニケーション—人は親しみをどう伝えあうか—』. 東京: サイエンス社.
- * Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *Modern Language Journal*, 78, 273-284.
- * Dörnyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*. Harlow: Longman.

- * Ehrman, M.E., Leaver, B., & Oxford, R.L. (2003). A brief overview of individual differences in second language learning. *System*, 31, 313-330.
- * Gardner, R.C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold Publishers.
- * Grice, H.P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J.L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics; Speech acts* (pp.41-58). New York: Academic Press.
- * 廣森友人. (2006). 『外国語学習者の動機づけを高める

理論と実践』。東京：多賀出版。

* 堀素子・津田早苗・大塚容子・村田泰美・重光由加・大谷麻美・村田和代。(2006).『ポライトネスと英語教育：言語使用における対人関係の機能』。東京：ひつじ書房。

* 磯田貴道。(2008).『授業への反応を通して捉える英語学習者の動機づけ』。広島：溪水社。

* Lakoff, R. (1973). The logic of politeness: Or, minding your p's and q's. In C. Corum, et al. (Eds.), *Papers from the ninth regional meeting of the Chicago linguistic society*. (pp.292-305). Chicago: Chicago Linguistic Society.

* Lakoff, R. (1975). *Language and woman's place*. New York: Harper & Row.

* Leech, G. (1983). *Principles of pragmatics*. London: Longman.

* 村田和代。(2004).「第2言語語用能力習得に与える影響と効果：ポジティブポライトネスの指導を通して」.『語用論研究』第6号, 57-70. 日本語用論学会。

* 大谷麻美・村田和代・村田泰美・重光由加。(2009).『Keep Talking—Strategies for interpersonal communication：今まで気づかなかった会話のコツ』。東京：マクミラン・ランゲージハウス。

* 竹内理。(2003).『より良い外国語学習法を求めて：外国語学習成功者の研究』。東京：松柏社。

* 滝浦真人。(2005).『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』。東京：大修館書店。

* 宇佐美まゆみ。(2001).「二一世紀の社会と日本語：ポライトネスのゆくえを中心に」.『月刊言語』第30巻, 第1号 (2001年1月号), 20-28. 東京：大修館書店。

資料・・

資料1：質問紙「コミュニケーションに関するアンケート」

コミュニケーションに関するアンケート

以下の項目について、英語で会話をしていた時に自分が意識したり、心がけたことについて1～5の段階で回答してください。

- | | |
|---|----------------------------|
| 5 | とてもしていたと思う・とても意識した |
| 4 | ややしていたと思う・少し意識した |
| 3 | していたかどうか、どちらとも言にくい |
| 2 | あまりしていなかったと思う・あまり意識しなかった |
| 1 | まったくしていなかったと思う・まったく意識しなかった |

【自分が話をするとき】

1. 相手にわかりやすく話そうとした
2. 伝えようとする気持ちを持って話した
3. 時には身振り・手振り、ジェスチャーを使った
4. 相手の目をしっかり見て話した
5. 相手の目をあまり見すぎないで話した
6. 少しおもしろく（少しオーバーに）話した
7. 少し高いトーン・テンションで話した
8. (6, 7を受けて) わざとらしくしすぎないで話した
9. 冗談もまじえながら話した
10. 感情を伝えられるように、表情をつけて話した
11. 話の要点をわかりやすく話した
12. 話にオチをつけた
13. 話の起承転結があるようにした
14. 順序立てて話すようにした
15. 1人で長く話しすぎないようにした
16. あまり自分の話ばかりしすぎないようにした
17. 相手によって、何をどこまで話すか考えて話した
18. 相手に返してもらえそうな話題や話し方をした
19. 相手の意見を尊重した上で、自分の意見を話した
20. 相手の好きなことを話題にしたり、相手のわかることを話題に入れた
21. 文法的に正しい英語を話すようにした
22. 話をしながら、ときどき相手の名前を呼びかけた
23. 相手から質問をされたら、yes/noだけでなく、関連した内容の話を詳しくした

【相手の話を聞くととき】

24. 笑顔など表情をつけて話を聞いた
25. 「うん、うん」などとあいづちを打った
26. あいづちだけでなく、その話題に関して何かコメントをした
27. あいづちだけでなく、その話題に関して質問をした
28. 相手の目を見て聞いた
29. 相手の目を見すぎないで聞いた
30. 話の内容に合わせて適度にリアクションをした
31. おもしろかったり、驚いたときは少しオーバーにリアクションをした
32. 相手の話の腰を折らないようにした
33. 話を聞きながらも適度に、自分のことについても話した
34. 話を聞きつつも、話題も提供した
35. 話を聞きながら、相手に共感した
36. 相手の意見を尊重した
37. 相手の話に賛成できない場合は、やんわりとした表現でそれを伝えた
38. 相手の話に賛成できない場合も、賛成しているように聞いた
39. 相手の話が理解できないときは、聞き返して確認をした
40. 個人的な内容など、つっこんだことは質問しないようにした

5 分間英語で会話をしたことに関する感想について、それぞれ 5 段階で当てはまる度合いの数字で回答してください。

強く思う 5 ← 4 — 3 — 2 → 1 まったく思わない

41. 思ったより話せたと思う
42. 言いたいことが英語でなかなか言えず、苦労した
43. 話す相手がネイティブではなく、同じくらいの英語力なのであまり緊張しなかった
44. 「英語で話をした」という達成感があった
45. もっと話せるようになりたいと思った
46. 楽しかった
47. 相手の人がちゃんと聞いてくれたので、話しやすかった
48. 授業や日常生活の中で、もっと英会話ができる機会があるといいと思った
49. 会話を続けるためには、話す側だけでなく聞く側の心がけも大切だと思った
50. 中学から勉強している単語や文法は使えると思った
51. 会話で使える表現力をもっとつけたいと思った
52. 英語力も大切だが、会話では相手との協力も大事だと思った

～Tips for Conversation 2～

相手に興味を示そう

相手が話すことに対して、「あいづちを打って聞く」というのはほとんどの人がしています。
そこで、自分の感想や感情を表す言葉を入れてみたり、その内容で興味を持ったところについて相手に質問したりしてみましょう。このような感想や質問は、「あなたの話に興味がありますよ」というシグナルになります。

Mami: How was your weekend?

Yuki: It was great. I went to Tokyo Disneyland.

Mami: Oh, that's nice. Did you have fun?

Yuki: Yes! I enjoyed the night time parade. I took a lot of pictures.

Mami: Who did you go with?

Yuki: With my family. How about you? How was your weekend?

1. 質問の表現例

相手の話について詳しく尋ねる表現

How was it?	(それ、どうだった?)
Where is it?	(それ、どこ?)
How did you like it?	(それ、良かった?)

相手に話を振る表現

How about you?	(あなたは、どう?)
What about you?	(あなたは、どう?)
How is your family / homework?	(ご家族／宿題は、どうですか?)
What do you think about this?	(これについて、どう思う?)
What are your thoughts on this?	(これについて、どう思う?)

5W1H の質問でもっと詳しく尋ねることができます

what / where / who / when / why / how

2. 質問を考えてみよう

1. I went to Hakone with my family last month.
2. I have a dog. It's really cute.
3. I belong to the dance club.

3. 実際にペアでやってみよう

How was your weekend?